

野上彌生子の文学

渡辺澄

渡辺澄子 著

野上彌生子の文学

渡 辺 澄 子 (わたなべ・すみこ)

東京都に生まれる。

日本女子大学大学院文学部日本文学研究科修士課程修了。

精華学園高校教諭，昭和学院短期大学助教授を歴任。

現 在 大東文化大学教授。

主 著 『野上彌生子研究』(八木書店)

主論文 『『明暗』私論』『与謝野晶子論』(ともに「昭和学院短大国文科紀要」)「女流文学の現況」(「文学的立場」連載)「清水紫琴論」「平塚らいてう論」(ともに「信州白樺」) その他。

現住所 東京都練馬区中村 2-20-2

検 印
省 略

野上彌生子の文学

近代の文学16

〒101 東京都千代田区猿樂町二八―一三
(株) 桜 楓 社
電話 (〇三) 二九五―八七七―
振替 東京 六一―八〇二〇

著 者 渡 辺 澄 子
発 行 者 及 川 篤 二
印 刷 所 (株) シナノ印刷

定 価 四八〇〇円

昭和五十九年五月二十日 初版印刷
昭和五十九年五月二十五日 初版発行

野上彌生子の文学 目次

人と生涯	5
漱石と野上彌生子	14
野上文学の原点	44
児童文学	64
『海神丸』	88
『真知子』	128
一 『真知子』の史の意味	128
二 『伸子』と『真知子』	136
三 『真知子』と『高慢と偏見』	158
『迷路』	171

『秀吉と利休』	205
---------------	-----

*

野上彌生子年譜	225
---------------	-----

野上彌生子参考文献	260
-----------------	-----

あとがき	275
------	-----

初出一覧	278
------	-----

資料 全集（岩波書店刊）未収録作品	279
-------------------------	-----

BIOGRAPHICAL STORIES OF GREAT PEOPLE FROM OTA PREFECTURE	300
--	-----

人と生涯

野上彌生子は九十九年前の一八八五（明治十八）年五月六日、九州、大分県北海部郡臼杵町五二一（¹）（現在の臼杵市大字臼杵五三八、通称浜町一組）に、小手川角三郎、マサの長女として生まれた。兄弟に異母兄次郎、弟武馬（叔父の家業を継ぎ、金次郎を襲名）、妹ミツがいる（いずれもすでに故人）。

一九〇〇年、十五歳の彌生子は女学校入学のために上京した。女子の高等教育の普及した今日からは実感し難いことであるが、四年間であつた義務教育すら、女子の就学率約八割という時代に、片道四日間を要する東京まで、商家の娘を勉学に出すということはきわめて稀なことであつた。事実、臼杵に生まれた最初の女学生であつたから、東京のモダンな女学生風俗を身につけた彌生子が帰省すると、珍しがって、また義望から、少女や子供たちがぞろぞろと後について歩いたという。普通一般の少女たちにとって、夢でしかなかった女学生になるための東京行きを、いとも容易に可能ならしめた彌生子の家とはどのような家だったのだろうか。

臼杵近郷の丹生村の貧しい百姓であつた祖父が、一旗挙げることを志して臼杵に出てきて、小さな酒造家に住みこんだのが、今日ある小手川家のはじまりとなつた。祖父は商人に転ずるや敏腕を発揮し、やがて五十石のこの小規模酒造家を自分のものにした。質屋や海産物の仲買などを兼業しながら醸造業の規模拡大をはかったが、彌生

子の父である長男の力を得ると、小が大を呑みこむたくましさで、百石、百五十石、二百石規模の同業者を吸収し、またたく間に、三百年の歴史をもつ格式高い商人の旧勢力に割り込んで、新興商人の意気を示し、臼杵の御三家と称されるまでの実力を保持する商家を築きあげた。

彌生子の生まれたのは、覇氣にみちた父角三郎の精力的な働きがみのつた、飛ぶ鳥も落すほどの隆盛期であった。角三郎ははじめ酒造に専心していたが、文明開化の変動が家庭生活に及ぼす影響を先見して、不用になった酒樽を利用して味噌・醬油製造を創業、この経営を弟金次郎に任せた。金次郎は酷薄なまでに商魂に徹した人で、角三郎の思惑を見事に的中、成功させたが、一方女性関係が派手で異腹の子どもの多い複雑な家族関係をつくり出した。それは財産問題のからむことでもあり、微妙な葛藤をうみ出した。金次郎の次女と従妹結婚した異母兄次郎にも同様の問題があって、少女彌生子の心の奥に、人間関係の複雑さを厭う思いを植えたと思われる。

彌生子が活気にみちてはいるが、複雑で騒がしい生家の環境から脱した生き方を求めて上京、進学の道を選んだことに関わりをもつと考えられる、母について簡単に触れておきたい。母および少女期の彌生子を含めた生家のありようは、『森』第七章「鴉の子」(一九七五年九月『新潮』)にかなり詳細に描かれている。とはいえ、自己の容貌をことさら醜く誇張して描いていた、いかにもうっとうしい人間関係は、百年の歳月によって晒され、淡々と客観描写されているなど、作者の生身を包んだ実体からは離れているように思う。

彌生子の母マサは、臼杵から約八里離れた三重町(当時大野郡市場村)の後藤家から、角三郎の強い希望に応じて、一八八四年七月、角三郎の二人目の妻として小手川家のひととなった。数えて二十八歳であった。後藤家は酒問屋、金貸しなどを業とした名うての格式高い豪家であったが、祖父喜十郎が土地の豪農二人とともに、一世紀半余を経た今日もなお補修を必要とせず現存している名橋虹潤橋を、私財を投じて架設して以来斜陽化して、マサが小手

川家にきた頃の後藤家の経済的实力は、往時の面影を失っていたらしい。

白杵の商人の成功者には丹生派と戸次派があり、両派の党派的对立は相当なものであったが、小手川が丹生派であったのに対して、後藤は戸次派であった。対立派からあえて嫁を迎えたのは、マサが三重小町と噂された美しいひとであったからであろう。マサの嫁入り模様は、彌生子の処女作「縁」にいささか美化・伝説化されて描かれている。「縁」には、婚礼の翌朝、美しい花嫁が惜し気もなく眉を剃り落したエピソードが描かれ、あわれに美しい情趣を現わしているが、この地方では、子どもができると眉を剃り落す習慣があり、マサがこれを行ったのは事実で、それは、丁度一年前に死去した先妻の残した五歳になる男の子を、我が子とした覚悟のほどを示したものと思われる。マサを知る人のすべてが異口同音に、百度出入りして百度変らぬ優しい人だったと褒めるが、明治の天皇制家族制度の柵の中で、なさぬ仲の長男をもち、多くの小姑や雇人たちに囲まれ、加えて対立派からきたことが重なり、当初は、語尾を長く引くことばの癖を嫌がらせにわざと真似て揶揄する者もいたほど、ずい分つらい毎日であったらしい。しかし、マサの英知はこれらの悪意にもよく耐え抜き、やがて前述した好評をかちとるようになった。彌生子はこの母の生き方から、正負両面のきわめて大きな教訓を得たものと思われる。

徹底的和・順を根幹とする女大学的生き方を、女の生き方はかくあるものと己れを殺して貰いた、本当に生きたようには生きていない母の生き方を、「そういうのを本当の生活とは考えたくない、そんなのはいやだ」と、母をこよなく愛しながら、それゆえにいっそう母のような生き方はしたくないと彌生子の理性は決意したのである。この決意をさらに強固なものにさせたのは、偶然によって入学した明治女学校であった。

商家の娘に高等教育を受けさせるなど、害あって益なしと考えられていた時代に、彌生子の東京遊学が許されたのは、家業が隆盛の一途を辿っていて、経済的負担など物の数ではなかったこと、板垣退助が小手川家を訪れた際

の記念写真が残されていることに証明されるが、父が政治面に深くかかわっていて、地方遊説にくる自由党の幹部たちとも親しい交際がなされていたが、その頃訪れた桜井駿に、自分の娘の学んでいる女学館を推薦紹介するといわれたこと、さらに家業の拡張発展のため血眼になった段階を通過し、安定した余裕が生じていたことから父が寛容であったこと、進取の気性のもち主であったこと、叔父豊次郎が在京していたことなどによると思われる。とはいえ、まだ年若い娘を遠隔地に母親が手離したがらぬのが普通であるが、仮名くらいしか読めなかったマサの日常的に痛感していた不便さ、くやしき、漢字を書いたり読んだりできる者に対するコンプレックスなどが、頼りにする長女の東京遊学を認めさせたのであろう。ともかく、彌生子にとってこれら諸条件がラッキーに作用した。まさに彌生子は幸運な星のもとに生まれたひと、といってもいいかもしれない。そして幸運は更に続いた。

漠然と女学館に入学するつもりで上京したのに、その手続きを依頼された叔父豊次郎は、姪の進学に対する関心の薄さから、この雑事を島田三郎におしつけたのであった。「一生の傾向に殆んど運命的に影響したことを後年思いやると、おもしろいより『偶然』の怖ろしさを感じさせられる」と後年彌生子自身述懐しているように、「普通の学校とは違った学校の行き方を知っていたわけでもなければ、勿論それに憧れをもったわけでもない」明治女学校には、島田三郎から小面倒と更にバトン・タッチされた木下尚江に連れていかれたのであった。明治文化史、教育史上並々ならぬ意義をもつ明治女学校から、彌生子の得たものはかり知れぬほど大きい、一口に言えば、世間の思惑とか、習俗・形式などにとられぬ明治女学校風ともいえる、一種の精神主義といってよいかと思う。そして、これが野上彌生子の人と文学の中核となったのである。

さらに彌生子が文学者として生きることとなった最大要因に、野上豊一郎との結婚をあげることができるが、これも、いきなり原書を辞書を頼りに読ませるこの学校独特の、高度な教育法に起因している。語学力の低さを痛感

した彌生子は、はじめ外人宣教師の個人教授を受けたが、やがて彌生子より二年遅れて上京し、第一高等学校（旧制）に在学していた同郷人の野上豊一郎に教えを受けるようになった。豊一郎も白杵出身の唯一人の一高生であった。二人の出会い、彌生子の小学校時の同級生で、遊び友だちでもあった久家あいの兄一郎の紹介によると思われる。やがて東京大学文学部英文科に進んだ豊一郎と結婚することになるが、これはスムーズになされた結婚ではなかった。

御三家と称された小手川家の長女の結婚相手として、学問はいかにできようとも、小さなあげ酒やと雑貨やを兼業する野上家の一人息子では、地位、財産ともに対象のらち外であった。家の財産の拡散を警戒し、伸長をはかる政略的結婚が自明のことのようにされていた時代に、家に何ら益することのないこの結婚が許される筈はなかった。しかし、すでに知恵の実を食べてしまった彌生子に、帰郷して親の選んだひとを夫として、母のように生きることはいかにしてもできぬことであった。

明治女学校の教育が彌生子の自我を貫かせた。豊一郎との結婚（当時においては勇氣ある自由結婚）についての、「私が勉強できると思ったのでしたのよ。勉強するための手段として結婚しましたのよ」は、豊一郎没後二十年の頃の発言であるから、もちろん言葉通り受けとるべきではないが、「あるじは、国の人でしょ。帰省や上京のとき、いつも一緒でした。妹のように、コウリをしばってくれたり。兄でもあり、先生のような人だったのね。わからぬところをきけばわからしてくれといった人だったの。……野上が、面白いからよんでみるというとながら私がそれを勉強するの、あるじが貧乏な教師ぐらしをしているとき、お金もないのに、お手伝いを二人もおいてくれました。おえらい方でも、普通奥様にそうおさせにならぬのに。おかげで、子供の世話や家事をみてもらえたわけです」はすべて事実のようであるが、とすると、豊一郎は「結婚してものを書こうとは思わなかったけれど、何か知識を求める

とか、人間的に成長するとか、そういうことは続けたかった」彌生子の理想とした家庭生活を可能ならしめる、文字通り理想的な夫であった。

彌生子が決して甘えや怠惰に身を任せぬ、強固な精神力で己れを持したからとはいえ、当初望んだ以上の生き方をもつことができた要因のひとつに、妻を夫や家事の奴隷にしなかった、豊一郎を夫にしたことの大きさを挙げたとしても、彌生子をおとしめることにはならないだろう。むしろ、家の反対を押し切って、豊一郎を夫とした彌生子の眼力の確かさに感心するべきかもしれない。豊一郎は、彌生子にとって夫である以上に、終生変らぬ師であり、兄であり、友であった。「ものを書くとは思わなかった」彌生子が、作家としての第一歩を踏み出したのは、夏目漱石の弟子であった豊一郎が、山房での昂揚した文学的雰囲気、帰宅してから再現してくれることに触発されたことであったし、妻の書いた「ほんの綴り方」めいた習作を、臆する所なく漱石にみせ、懇切丁寧、かつ細かな指導、批評を仰ぐ取次ぎをしてくれたばかりか、豊一郎を通して、『仰ぎみる山』であった漱石から、とも角一個の作家として一人歩きできるようにするまで、作品の発表誌の紹介、推薦を受けることができたのである。

また、彌生子文学独特の堅固なリアリズムは、周知有名のことであるが、はじめての習作について書かれた漱石の感動的な長文の手紙に示された、まず写生文を書くことの指導の成果と考えてよいかと思う。さらに漱石は、文学者たらんと欲するならば、文学者として年をとること、思索綜合の哲学をもつことを囁んで含めるように優しくしかもつよく教えている。もちろん、問題はその教えの受け手の側にある。この時期、漱石の身近にいた弟子たちが皆小説から離れてしまったのに対して、豊一郎の間においての間接指導を受けた彌生子が、漱石の教えを守り、焦らず、急がず、牛のように力強く、ひた歩みに歩んで、日本文学史上稀にみる息の長い、しかも末広がりの作家としての成長を遂げているところに、彌生子の人と文学の偉大さと栄光をみるのである。

すこし横道にそれたが、彌生子の談話がよびおこす、豊一郎と結婚したことのメリットをもう一、二点あげるなら、この時代の女流作家共有の、作品の素材、文体、思考パターン、さらに感情の発現にみられる私小説的、本的情緒纏綿とは趣を異にした、乾いた文体、合理的、論理的、近代的思想は、豊一郎の勧め、示唆、協力、指導による英国を主とする近代ヨーロッパ文学から摂取した教養と翻訳が大きく寄与していると思われることである。さらに、彼女の文学的世界のひろがりの上で見逃すことのできないのは、後に能の研究者として第一人者となった豊一郎の影響である。このことは後述するつもりであるが、彌生子の児童文学とも密接な関わりをもつ。

このように彌生子の文学者としてのありようを眺めてくると、文学論における平野謙のユニークな視座を示す「芸術と実生活」論が思い出される。「芸術家の場合、わけて日本の私小説家のような場合、その芸術家生活の持続と家庭生活の平穏とはしばしば一致しない。家庭の和楽は芸術家の情熱をなしくずしに沈滞させ、家庭の危機という餌食によって、はじめてその芸術衝動は切迫感を獲得する」の平野の言葉に、葛西善蔵や嘉村礪多をはじめ、「半日」（多分未発表の「一夜」も）の鷗外、『新生』の藤村、さらに『くれなゐ』その他の佐多稲子から『伸子』の宮本（中条）百合子等々まで、それぞれは違いながら共通項をもつものとして、実感的に切実に考えさせられるのであるが、彌生子においては、芸術と実生活の二律背反などなかったのではないか、とさえ思われるのである。

彌生子は私小説家ではない。事実、私小説は認めないと断言すらしていて、注意深く私小説的素材を扱うことをさけている。しかし、一目して判然たる実生活を全く描かなかったわけではない。三人の子どもの母親になっていく過程で、子どもたちの生きた心理、母親としての心理やありようを描いた一連の作品、お手伝いの女の子を材料にしたもの、女学生時代身を寄せた経済学者でせむしの奇人、叔父豊次郎をモデルにした一連の作品、軽井沢山荘取得のいきさつ、等々、さらに夫の女性問題を扱ったものすらあり、これらの作品には、例えば子どもの教育方針

については、妻のそれに夫は遅疑することなく、同調、協力していて、我が子の教育について夫婦間に齟齬はなく、また夫の女性問題という、芸術と実生活の二律背反の恰好の条件を備えた問題に当面しながらそうならず、〈堅実〉そのものの家庭の和楽が維持、継続されるのである。

人間失格、人格無視の長い歴史をもつ女性が作家である場合、男性作家における「芸術と実生活」問題とは様相を異にし、事態はいっそう深刻、苛烈で、作家として生きることより大切にしようとすれば、家庭生活は修羅場となり、その血みどろのたたかいはらった犠牲によって、作家としての自己をふとらせていくパターンが多い。しかし、このようなパターンとも彌生子は無縁である。彼女の描く、作者の実生活を思わせる家庭は常に円満で、ここに登場する女主人公は冷静、理性的で誇り高く、どんな事態にもとり乱すことはない。その夫も妻の人格を尊重する優しい、物わかりのよい人物である。先に引用紹介したような豊一郎を夫にもつ彌生子の『芸術』と『実生活』は全く調和しきっている、というよりむしろ、一体化していたとすらいえるようである(だが、彌生子にとって家庭＝実生活が、芸術家としての彼女に本当に修羅場、修羅の巷であったことはなかったのだろうか、という興味深い疑問の生ずるのを禁じ得ない。この点が明らかにされるならば彌生子文学はより深く理解されるのではないかと思う)。

それを可能にしたのは、彌生子が信条としていた「汝自らを知れ」であり、「私のたった一つの特徴は、辛抱強いということなんです」にみられる英知であり、夫豊一郎の性格、人柄であろう。あえて具体例を挙げるならば、午前中は執筆時間ときめた彌生子の規則正しい生活を、子どもたちとはもとより、豊一郎も決しておかすことはなかったそうであり、家事や育児に振り廻されることも、樋口一葉や与謝野晶子や佐多稲子のように生活のために書かねばならぬこともなかった。空腹と睡眠不足を彌生子は特に警戒し、使用人たちにもお櫃が空になる状態には絶対させなかったというが、この世には怠惰や努力不足によるのではなくて、空腹や睡眠不足に苦しみ、泣かねばなら

ぬ人びとの大勢いることに、本当の深い同情は注がれていないことは今問わぬこととして、空腹や睡眠不足がもたらす悪しきものを排除し、円満、充足を求めたその人生態度は、百合子の『伸子』の伸子が、夫の出勤後に自然の目覚めで起き、スポンジが水を吸いこむように、澄明な頭脳で食婪に知識を吸収したのと同様に、九十九歳の今日もなお衰えぬ飽くなき好学、向学心をみたまふ最良絶好の土壤であらう。

この土壤に育てられて見事に開いた大輪の花が、生涯の傑作『秀吉と利休』であるといつてよいかと思う。マイ・ペースの仕事を乱さぬ合理的生活を順守し、勁い意志力、精神力、持続力で不断に向上、発展を遂げた野上彌生子は、日本近代文学史上に類型を求めて求め得ぬ、まことに稀有、非凡の作家である。それは、いまなお満九十九歳の肉体と頭脳によって生み出されつつある、八十五年前の青春期を描いている「森」にみられる記憶力の確かさと、その筆の瑞々しさがいみじくも証明している。

聳えたつ高山の頂上めざして、一步一步、決して無理をせず、しつかり大地を踏みしめながら登ってきた彌生子の八十年間の『仕事』は、寡作な作家といわれながらも、小説、翻訳、戯曲、随筆、評論、童話、紀行文等、ほとんど全ジャンルにわたる大量のものである。八十歳になんたとする高齢で書きあげた『秀吉と利休』を頂点とする、『真知子』『迷路』等々の優れた、しかも問題的小説を書いてきた彌生子の作家研究上、見落せぬものを感じる、評論があるが、これまで全くといってよいほどに閑却されてきた児童文学に、この作家の人と文学を解明する案外な鍵があるようにも思われる。

注(1) 「臼杵町五一」は「臼杵町二二三」、「臼杵町二二〇」、「臼杵市大字臼杵五〇一」と番地変更されている。

(2) 青山なを著作集第二巻『明治女学校の研究』(一九七〇・一、慶応通信発行) 参照。

漱石と野上彌生子

——明治四十年から四十二年までの彌生子の写生文を中心に——

平野謙は、野上彌生子の「或る男の旅」を、漱石の『こころ』を連想させる「大へん倫理的な作品」であり、「作者がまさしく、漱石の弟子たる所以を證かすにたる作品」として注目している。そして、野上彌生子が漱石の弟子である所以を、「私の思いつくかぎり、単なる円熟ではなくて、生々發展してやまぬ作家は夏目漱石ただひとりである。『吾輩は猫である』から『明暗』にいたるまでの驚くべき作風の変化は、まさしく、エントライツクレンク發展としか呼ぶようがない。漱石個有のイデアリスムスのゆえんである。野上彌生子はそういう漱石の唯一の弟子たるに恥じない人である」と述べている（講談社版『野上彌生子、宮本百合子集』解説）。また、篠田一士は、「いまかりに夏目漱石の小説遺産をもっとも正統的に受けつぎ、同時に、現代という時代のなかで、それを生々と実現した作家がだれかということになれば、ぼくは『迷路』、あるいは『秀吉と利休』の作者である野上彌生子をおいてほかにない」と「断言」し、「漱石の小説群が未来の日本文学に対してかがやかく提示した普遍的命題」である「近代ヨーロッパ小説の方法」と、「そうした小説形式による近代日本の文明批評」を、「現実のあたらしい事態において展開した」のが『迷路』であり、『秀吉と利休』であると書いている（集英社版『野上彌生子集』「作家と作品」）。

私は野上彌生子の作品における倫理性を、男女間の愛の問題の側面から「柿羊羹」、「K男爵夫人の遺書」、「柿